

気維持は不可能で術中にV-V ECMOを使用し、胸腔鏡下に肺嚢胞を結紮した。手術終了後、容易にECMOから離脱できた。術後、気胸の再発はなく、間質性肺炎の急性増悪もなく経過良好であった。貴重な症例を経験したので報告する。

18 CEA高値、臨床病期I期肺癌に対する対応

竹重麻里子・小池 輝明・大和 靖

吉谷 克雄・佐藤 衆一

県立がんセンター新潟病院呼吸器外科

1991年～2007年に手術を行った原発性肺癌2183例のうち、臨床病期I期2063例について調査し、CEAと予後との関係を調べた。術前CEAは平均4.5(0～506)ng/mlで軽度上昇群(5ng/ml-10ng/ml)は261例(12.7%)、高値群(CEA>10ng/ml)は125例(6.1%)であった。それぞれの生存率には有意差がみられた($p<0.01$)。また、CEA高値群については術後外来受診時にCEAを再検し、CEAが正常化した群、高値群に分けて検討を行ったところ、正常化した群で有意に生存率が高かった($p<0.01$)。臨床病期I期の症例において術前CEA高値は予後不良因子であり、特に術後CEAが正常化しない症例は予後不良であった。

19 肺葉内肺分画症の1例

佐藤征二郎・保坂 靖子・富樫 賢一

長岡赤十字病院呼吸器外科

58歳男性。血痰・微熱を主訴に当院受診。右肺化膿症の診断で入院となった。胸部CTで、右肺下葉に高濃度血腫を含む腫瘤影と下行大動脈より分岐し右肺下葉に流入する異常血管を認めた。肺葉内肺分画症を疑い、手術の方針となった。感染範囲が下葉全域に及ぶことから、下葉切除を施行し、異常血管は13mm程度の太さであり、no-knife endoscopic linear staplerを用いて閉鎖した後、末梢側をENDOPATH ATW35(Ethicon Endosurgery)を用いて切離した。病理所見では、正常気管支の分岐異常、病変部との交通は認めず

肺葉内肺分画症(Pryce II型)であった。No-knife endoscopic linear staplerを用いることで、安全に異常血管の処理を行うことが可能であり、有用であると思われた。

20 食道壁内転移を来した胃内分泌細胞癌の1例

島田 哲也・牧野 成人・渡辺 ゆかり

榎本 剛彦・須田 和敬・西村 淳

河内 保之・新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院外科

症例は67歳男性、2ヶ月前から喉の食物つかえ感を主訴に当院内科受診し、上部消化管内視鏡で噴門部に3型の進行胃癌を認めた。下部食道には壁内転移を疑う粘膜下腫瘍様の病変を認めた。手術目的に当科紹介となった。左開胸開腹胃全摘、中下部食道切除、膈体尾部、脾合併切除を行った。術中行った腹腔内洗浄細胞診は陽性であった。病理組織診断は内分泌細胞癌で、広範なリンパ節転移と食道壁内転移を2箇所認めた。術後化学療法施行したが、術後6ヶ月で肝転移と腹膜再発による腸閉塞を来し、術後10ヶ月で永眠された。

食道壁内転移を来す胃癌は極めてまれである。術後早期に再発を認めた、食道壁内転移を伴う胃内分泌細胞癌の1例を経験した。文献的考察を加え、報告する。

21 食道癌術後の進行胃管癌症例に対して、化学療法後に胃管前庭部切除を行った1例

田中 雅人・矢島 和人・神田 達夫

番場 竹生*・中島 真人・松木 淳

小杉 伸一・西倉 健*・畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野(第一外科)

同 分子・診断病理学分野*

症例は58歳、女性。2000年9月に胸部中部食道癌に対して胸腔鏡補助下食道切除術、後縦隔経路胃管再建を施行されていた。術後スクリーニング目的の上部消化管内視鏡で再建胃管に低分化腺